

春城顕彰と生地

旗 野 博

はじめに

春城生家の一部が現存していることを知ったのは一九八四年（昭和五九）に刊行された郷土誌『五頭郷土文化』に口絵として隠宅の写真があり、附された解説を読んだ時であった。ただ、そこには市島次郎吉邸宅の一部とあるだけで、春城のことには触れず、寄寓した前原一誠の紹介にとどまっていた。

ちょうどその頃、吉田東伍の生家が生地安田に現存することから、東伍の顕彰をと地域の若者が勉強会を始めようとしていた。春城生地や水原（阿賀野市）と東伍生地の安田は、隣町であり二里（八キロ）しか離れていない。勉強会が中心となって「吉田東伍とその周辺」と題して展覧会を開催し、講師には谷川健一氏と蒲原宏氏にお願いしたのは一九九三年（平成五）のことだった。展覧会は盛況で県内外から多くの参加者を得、講演会は満席になった。展覧会には早稲田大学図書館から『大日本地名辞書』の「越後、佐渡」の原稿を借用し、展覧に供した。当時の図書館特別資料室の金子宏二氏には特段の配慮を願った。我々のような素人の若者集団に、貴重な資料を貸して下さった早稲田大学図書館と、金子氏には改めて御礼申し上げたい。私を含めた安田の若者は「春城も東伍も、若い時はこんなもんサ」と、ことの重大さに気がついてはいなかった。多くの方々の力を借り、この事業は成功した。このことが東伍生

家が吉田東伍記念博物館として生まれかわるきっかけとなった。東伍を学べば必然的に春城を学ぶことになるということ、この時に知った。そこから少しずつ春城を学び始めた。

ここでは、これまでの生地・阿賀野市における春城顕彰の活動について、手元の資料によってまとめてみた。

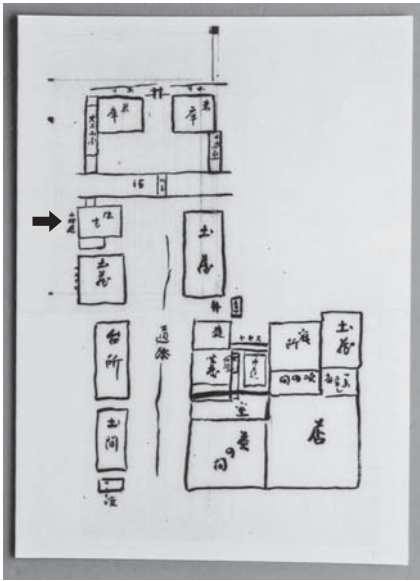
春城生家跡の一部と隠宅の市有

一九九六年（平成八）三月十七日の『新潟日報』は「越後府の証拠」と題して、水原の市島宗家別邸跡に建てられた県政発祥施設「越後府」の平面図と写真を掲載し、その発見は元水原町長、元県議の歴史家渡辺勇氏の手になることを報じていた。「越後府」は維新政府が越後に作り置いた初めての行政府で前原一誠が赴任したところだ。この重大発見は建築を生業とする私を、居ても立ってもいられなくした。しかし卓越した政治手腕の持主であり、歴史学にも深い造詣のある渡辺氏をいきなり訪問しては失礼と思い、それから半年後、ついに訪問の日を迎えた。今にして思えば、この渡辺氏との邂逅が私にとつては具体的な春城顕彰の始まりになった。発見された平面図と写真をもとに「越後府」の模型を作ることになった。製作は新発田市にある新潟職業能力開発短期大学の住居環境科に依頼することになり、私が窓口になった。水原町とは渡辺氏が交渉にあたり、模型は一九九八年（平成一〇）に卒業研究として完成し、水原町に寄贈された。翌年には「越後府」のシンボルである矢倉が別邸跡の旧位置に復原され、文化施設再建に勢いがついた。後日渡辺氏は「春城生家跡の隠宅を町有に、と当局に働きかけをしたのもこのころだった。いずれも同じで資金が無く頓挫したまゝ、」と語っていた。隠宅とは春城生家の一部でいわゆる離れで、「越後府」へ赴任した前原一誠が寄寓した建物のことだ。生家跡の一部にこの隠宅のみが奇跡的に残っていたのだ。

二〇〇三年（平成十六）東伍生家十一代当主旗野裕之氏が、生家跡の保存に向け、資金援助をして下さることになっ

た。裕之氏はすでに東伍やその周辺の人物の顕彰、地域の保存などに尽力されており、その縁からの援助であった。裕之氏のそうした活動の仲介をしていた私は、当初、「春城は東伍ではない」と言うことから、援助が実現するか多少不安があったが、生家跡の資料的価値を述べ、老化が著しいことを伝えると、裕之・マキ子ご夫妻は快諾して下さった。今にして思えば大変なことであった。裕之氏の祖母ヒサ氏は春城夫人ユキ氏の姉である。また、裕之氏は早稲田大学理工学部応用金属学科の出身（一九四四年卒）で「入学の挨拶に春城先生宅に伺った。細かいことは失念したが、お顔は覚えている」と語られ「會津八一先生にもお会いした。中条町（現胎内市）におられた。こんなに高名な方だったら何か一筆書いてもらえば良かった。會津先生訪問は母の意だった」と思い出を語って下さったこともある。

春城生家の跡地を所有されていた方と渡辺氏が交渉し、二〇〇四年（平成十六）十二月、合併直後の新生阿賀野市への譲渡が実現した。



生家配置図

二〇〇五年（平成十七）三月、前述の早稲田大学図書館の金子氏より朗報が届いた。金子氏は在職中より春城研究を続け、退職後も元図書館員との春城日誌研究会を継続し、『図書館紀要』に春城日誌の翻字を連載してきた。金子氏は「早稲田大学図書館で春城の『養痾漫筆』を調査中に偶然、生家全体の略配置図を見つけた、後日その写を送る」と伝えて来たのだ。この一報には驚喜した。送付された略図には広大な敷地の片隅に、隠宅が明示されていたのだ。この一件は我々の春城顕彰作業が間違い

のないもの、と確定してもらえた。

隠宅



春城生家跡の隠宅（解体前）

こうしたことがあった後、渡辺氏と隠宅の調査を始めた。屋根裏に入って驚いた。永い年月を経、部材の老化、腐朽も見られたが、梁の曲がりを巧みに組み合わせた。大きく張り出した土庇は、主屋の梁を天秤状に組み、主屋の屋根の重さで庇の先端部を跳ね上げる仕組みになっていた。現在ではあまり見られない工法であり、古えの工人の熟達した技法を示していた。隠宅は一部二階建てで一階八二㎡（二五坪）、二階は三二㎡（一〇坪）。取りつきの土間の左の突き出し部には水まわりがあり、風呂もあったようだ。次いで中の間。左手に小間と水屋。奥の座敷は一〇畳で濡縁が廻され、大きな土庇で覆われていた。床の間の左に床脇、天井は高く、二階の天井と同じ高さだった。春城は随筆に「邸内には隠宅があつて、それが母屋と離れて可なり広かつたので、そこを前原を宿す所とした。確か座敷を応接の間に充て、階上が居室で、寝所も爰に設けた」と書いている。（「幼時見た前原と奥平」「回顧録」）雨戸、障子を開け放った座敷からは、裏庭越しの川の眺めが、実に見事であつたに相違ない。

自然木を手摺にした廻り箱階段を登ると一〇畳間となり、奥には床の

間、左手に押入れがある。高欄がつく小縁がめぐり、弟とよく一誠のもとに遊びに行つた春城は、この部屋に「漫りに入ることの出来なかつた」理由として、「毎月長官が受取つてくる俸給が奉書紙で包んだま、放り出してあることであつた」と書いている。(同前)さらにその場所を「此の室には床の間がなく、其の代りに薄暗い物置のやうなものがあつた」としているが、「薄暗い物置」とは洞床、すなわち、内部のすみを湾曲に壁土で塗り廻した洞窟状の床の間のことで、数奇屋造りの床の間のひとつである。

工法、番付符丁などの筆跡、材種などから江戸末期の建築と推定した。この調査は断続的に続き、成果は復原としてまとめた。

春城展の開催

二〇〇五年(平成十七)六月、旗野裕之・マキ子ご夫妻からの資金援助を得、生家は正式に阿賀野市の所有となり、教育委員会は「史跡」に指定した。

市有を記念して「春城展」を開催することになり、私を含む二〇名余が実行委員に選任された。同年十一月末に初会合が開かれ、展示の概要と、講演会、図録発行が決定された。会場は水原公民館とし、会期は翌二〇〇六年(平成十八)五月十二日から十四日とされた。初会合からわずか半年後、準備が急がれた。資料の所在の確認、採寸、撮影と委員はフル回転した。ポスター、チラシが届いたのは四月五日、ただ展示会場のレイアウトは難航した。資料が溢れても困るが、少なくともさびしい。展示全体の流れを考える難しさに苦心したが、図録作成にはさらに手こずつた。明け方までの作業を繰り返し、なんとか完成にこぎつけた。早稲田大学からは、坪内博士記念演劇博物館から逍遙墓塔の拓本を借用したが、これは春城の筆になるものだからだった。設営作業は夜までかかった。作業の終りころ図録

が届いた。ズシリと重い図録は頼りがいがあった。

快晴のオープンニングに春城のお身内として次女ヒサ氏の子息矢吹彰男氏ご夫婦、四女ミツ氏のご養子栄治氏方より市島真二氏。早稲田大学からは中国文学の村山吉廣、大学史に詳しい佐藤能丸両先生がおいで下さった。三日間の入場者は六〇〇名を超え、会場から春城生家をおとずれる方々も多かった。最終日の講演会も満席だった。講師は前述した金子宏二氏。演題は「市島春城先生について」で、年譜をもとに講演して下さった。展示、講演会ともに大盛況で、裏方の皆も安堵したものだった。

春城会の発足

その後、有志が集まり、春城の研究と顕彰を目的とした会を結成しようということになり、春城展から日も経たぬ六月一日、春城会結成の準備会が開かれた。結成は一〇月五日。設立総会前に講演会も、となった。講師には元新潟大学教授の歴史家、井上慶隆先生にお願いすることになった。当日の演題は「私の越後史研究と市島春城」であり、春城について調べ、考えることが、越後史研究の上での指針となったことを紹介して下さった。総会では会則、役員、事業計画、予算などを決めた。活動の重点目標として隠宅の保存、活用を揚げた。会報は年二回発行、研修旅行を年一回おこなうこととし、会長には渡辺勇氏にお願いした。会員は一〇〇名を超え、熱気溢れる講演会であり総会であった。

早速の研修旅行は十一月八日、春城の墓参である。晴天のもと、五〇人余の参加を得、有意義な研修となった。帰着後、隠宅に立寄りここでも話が尽きなかった。研修旅行の第二回は春城一家が移り住んだ県北の関川村、三回目は春城が主筆を勤めた『高田新聞』の発刊の地である高田、そして四回目は今年これ又主筆を勤めた『新潟新聞』の

新潟市をまわった。春城にちなんだ土地で研修を続けている。会報は二〇一〇年（平成二二）新春、七号を発行する。

順調なすべり出しと思いきや、不幸なことが起った。二〇〇七年五月、会長渡辺勇氏が脑梗塞で倒れたのだ。会員には激震が走った。緊急の役員会もなすべがなかった。先年奥様を亡くされ、お一人で暮らしておられたが、高名な渡辺氏を訪ね来る人は引きもきらない。過労が遠因ではと誰れもが思った。臥療は翌年まで続き、八月六日逝去された。八一歳であった。二〇〇九年五月十三日、総会と合わせ追悼の会を持ち、思い出を語り合い献花した。何とも残念な出来事であったが、会は副会長の岩橋静哉氏に会長代行をお願いし、活動を続けることとなった。

話は前後するが、二〇〇六年（平成十八）一〇月二七日、萩の前原一誠宅の訪問がなかったのも渡辺氏のおかげだった。訪問前、渡辺氏にそのことを伝えようと、早速前原家に電話を入れてくれた。渡辺氏はすでに前原家を訪ねたことがあり、旧知の仲であったのだ。訪問した日は、折りしも吉田松陰の命日であり、萩の松陰神社は例大祭であった。松陰祭の前に一誠などの松蔭門人の祭典、松門祭が営まれていた。一誠に連なる方や地元の方皆さんの配慮で一誠の墓参もなかった。

萩訪問と隠宅の解体

私が萩を訪れた二〇〇六年、阿賀野市有になった隠宅を、市は老朽化が激しく危険と判断し、復原を前提に解体することになった。にわかな話で驚いたが危険と言われればなすべはなかった。解体が確定したころ、山口県で前原一誠の顕彰活動を進めている青田國男氏から「一誠の暮らした住まいを見たい」と電話があった。空路の到着は十一月十六日。同行の方たちと、安田や水原の一誠ゆかりの地を訪れ、その後「越後府」のあった市島宗家別邸跡を経て隠宅へむかった。解体作業は半ばを過ぎていた。復原を前提に、とは言うものの解体されてゆくその姿は何ともさび

しく、皆で見つめていた。

翌日は、吉田東伍旧宅や県立図書館、さらに会津八一記念館で、前原や春城ゆかり品々をご覧いただき、夕刻、再会を約して別れた。

生家跡の公園化と春城胸像

二〇〇八年（平成二〇）一月二日、旗野裕之氏が亡くなられた。八八歳であった。春城隠宅再建へ向け市側と折衝半ばのことであった。

江戸末期の建物をそのまゝの復原したのでは現代の活用に支障がある。空調設備、駐車場の問題、そして何より活用の展望が示されなくてはならない。一進一退の折衝が続いていたのだ。

旗野裕之氏は一方で、自らの母校である早稲田大学に対しても、吉田東伍、市島春城の顕彰のために図書館に、また出身学部である理工学部の創設百周年にと多額の寄附をされた。

翌二〇〇九年（平成二一）三月、早稲田大学図書館長の加藤哲夫先生が裕之氏宅のマキ子夫人のもとを訪れ、「来年は春城先生の生誕一五〇年にあたる。これを記念し、先生の胸像を作り、図書館に設置し、訪れる多くの人々に春城先生について知っていただくことで裕之氏のお気持ちに込めたいと思う。」との意向が伝えられた。マキ子夫人は快諾、草創期の早稲田大学の発展に尽くした春城の像がようやく作られることとなった。

九月十一日、加藤館長は図書館事務部長の中元誠氏と共に再びマキ子夫人のもとを訪れ、春城銅像制作の進捗状況を報告、その中で「銅像は二体作成し、一体は大学図書館に、もう一体を新潟県新発田市に贈り、市島邸に設置していただく予定である」との話があった。市島邸とは、市島宗家の邸宅で、現在県の文化財に指定されている。越後の

豪農の暮らしぶりを知ることのできる立派な建物で、分家筋にあたる春城とも交流が深く、関連資料も所蔵しているという。また、新発田市と早稲田大学は、校友会活動や文化事業を通じて交流を深めており、そうした関係から春城像の贈呈ということになったのである。大変喜ばしく、実現の日がまたれるが、これまで春城顕彰に尽くしてきた春城会としては、また別の思いもあった。それは、「生家跡にも胸像を設置できないか」ということである。解体された隠宅の跡地は、現在公園として活用してゆく方向で検討が進められている。何とかそこにも春城像を、と、春城会として阿賀野市に働きかけ、実現の日を待っている。

おわりに

二〇〇九年（平成二二）十一月二日、新発田市は天王の市島邸で講演会を開いた。講師は早稲田大学図書館の藤原秀之氏。詳細は本誌上に同氏より紹介されているが、図書館と春城との関係を時に笑いを誘いながらのわかり易い巧みな講演は好評だった。講演会前の夏には、新発田市の文化会館で早稲田大学合唱団によるサマーコンサートが開かれ、満席の聴衆を魅了した。同市の月岡温泉で合宿し、その成果の発表も兼ねていたとか。その両方に参加した私は、新発田市の企画力、行動力に感歎した。

一方で、阿賀野市は春城生誕の地であり、生家跡の一部も残り、そこを市有にした。春城会の会則第一条は「この会は、郷土が生んだ偉人市島春城の業績を顕彰し、春城生地跡の史跡を後世に伝えることを目的とする」としている。会の目的はこの一条に尽きる。

新発田市五十公野の市島一族墓地に春城一家は眠っている。その墓塔は生地に向って建っている。新発田市と阿賀野市は隣接し、顕彰すべき春城を共有しているのだ。

記録魔の春城は生涯日誌を書き続けた。『早稲田大学図書館紀要』に連載された日誌を読めば、春城のもとを中央はもとより、新潟県の各界からも多くの人々が訪ね、最新の情報を持ち帰っていたことがわかる。それはあたかも新潟県の東京事務所の様を呈していたようだ。生誕一五〇年を期に、今度は春城が新潟に帰って来る番だ。心して迎えたい。春城顕彰は、次代に残せる重要な文化と確信している。

生地での春城顕彰を知ってもらうためとは言え、私事が多くなった、ご海容を。

（はたの ひろし 新潟・春城会幹事長）